

女性が奏でるまちづくり事業関係者と市長との「”本気”で語ろう会」会議録

団体名	女性が奏でるまちづくり事業関係者
日時	令和3年2月8日（月）14時から15時30分まで
場所	全員協議会室
参加者	村田史子（Enjoy！転勤ライフ）、福元ゆみ（フリーパーソナリティ）、隈崎和代（おおすみハナマルシェ実行委員長）、市村良平（ファシリテーター） 4名
	市長、市民課職員、政策推進課職員

【参加者の意見】

○令和2年度に実施したワークショップの感想について

- ・参加者の学びたいという姿勢や誰かのために役に立ちたいという思いがあることを強く感じた。
- ・高校生に結婚について話を聞いたら、結婚したら自由がなくなるような気がすると言っていた。結婚が無意識に不自由だと感じているのだなあと思った。
- ・職場や家庭で、良好な人間関係を保てる方法を参加者に伝えることができた。
- ・今後、何かを始めたい、活動をしたいと思っている参加者が多かった。それぞれが活躍しやすい環境をどう作っていくかが重要だと思った。

○女性が思いを自己実現しにくい雰囲気や制約について

- ・女性には、働くにも越えなければならない項目がいくつかある。子育てやパートナーの理解など社会に一步踏み出すことは簡単ではない。
- ・一時期、名刺を作っていないときがあり、社会から疎外されている気がしたことがある。
- ・何か大きなことをやろうと思って、活動を始めたわけではない。自分は、人が喜んでくれることがどんどん膨らんで、地域や社会のためにつながっていると思っている。
- ・会社に育休制度がなかったり、制度があっても前例がないことで、休みを取りづらい女性がいると聞いた。
- ・家庭内のマネジメントも性差でなく、個人差で進めるべきである。

○社会や地域に関心を持ち、行動につなげる手立て

- ・「好奇心」を持つ。関心を持ってもらう。
- ・自分の活動や気持ちを、誰かに認めてもらうことで、次の一步へ進められる。

○若い世代の人口流出について

- ・コロナ禍で、これまで県外に流出していた学生がオンライン等を活用してどこからでも学べる時代になったのではないか。
- ・若者と話をすると、「一度県外に出てみたい。あの施設があるから、その近くで

暮らしてみたい。」と言っていた。

- ・ 福利厚生や給料など県内でも鹿屋市外の事業所の方が、待遇がいいらしい。
- ・ 以前、Uターンしたカップルに話を聞いたところ、「県内が子育てしやすいところだと思って、暮らすことにした。」と言っていた。子育てをどこで行うか、考える時期があると思う。その時、地元で子育てしやすい受け皿があることが重要だと思う。
- ・ 地元に戻ってきて、できることや良かったと思える実践例を示したら良いのではないかと考える。
- ・ 転勤族もいつか住居を構える。もし、住んで良かったという感触があれば、そこを通りすがりの場所にするのではなく、また戻ってきたい場所になってもらうことがまちの将来につながる。そして、その子どもが、あの地域で住んでいるとき、お母さんが楽しそうだったと感じれば、その土地で暮らしたいと思うはずである。

#### ○自己実現できるまちにするためへ一言

- ・ 小さなことでいいので、地域づくりや人づくりをしている人に光をあててほしい。人でまちが成り立っていることを理解してほしい。
- ・ 「#鹿屋っていいよね」を募集したらどうか。小さな気づきを集めて、鹿屋の良さを再確認する。
- ・ 頼れる人を身近につくる。SNSだけでなく、顔を合わすことも大事である。
- ・ シビックプライドをどう高めるか。「鹿屋だからできること」を生み出す。移住定住にもつながると思う。

#### 【市長】

- ・ 昨年実施したワークショップが大盛況だったそうで、自分も参加したかった。
- ・ ワークショップに参加した人は、それぞれ問題意識を持ったり、貢献したいと思っている人たちだったことがうかがえる。
- ・ 私たちは、市民の思いに貢献したいと考えている。
- ・ 女性が輝くには、男性の協力や理解も大事である。
- ・ 知らない土地に家族と引っ越して来るには、覚悟が必要だと思う。地域の受け入れ体制やコミュニケーションが必要である。
- ・ 転勤族の居場所づくりも大切だと思った。女性の制約についても知ることができた。